

PTA活動が保護者のソーシャル・キャピタル醸成に及ぼす影響： 複線径路・等至性モデルによる分析

稲木 隆一¹⁾・上田 菜央¹⁾・扇原 淳²⁾

Study on the Mechanism and Effects of Social Capital Building by PTA Activities among Parents: Analysis by Trajectory Equifinality Model

This study seeks to clarify the mechanism and effects of social capital building among parents, to whom parent-teacher association (PTA) activities are targeted.

Nine PTA officers in Saitama prefecture's Tokorozawa Municipal A elementary school participated in semi-structured interviews of about 60 minutes each from October to December 2015. All dialogue was recorded on digital voice recorders. A written, verbatim record was also obtained and a Trajectory Equifinality Model (TEM) was performed. In this study, we regard "development of generativity" as the capture point for experience and cognition, which are the "before and after" in an individual's development as parents.

Social capital building brought about by targeted PTA activities were classified into four categories: social capital between protector, school, region, and home.

Our study findings suggest that PTA activities contribute to various educational effects, including improved academic achievement and reduction in problematic behaviors of children.

【背景】

日本では現在、共働き世帯¹⁾やひとり親世帯²⁾の増加、個人主義文化への変容³⁾などの影響により、PTA (Parent - Teacher Association) の存在意義が問われている。その中身は、PTAには自働・強制加入、過大負荷や役員選出方法などに問題がある⁴⁾とされ、PTA不要論も存在する。

一方、PTAに参加することによる保護者へのメリットについては次のような主張がある。例えば、学校での子どもの様子がよく分かるようになること、自分の子どもだけではなく、他の子どもたちとも交流ができること、保護者同士の交流・情報交換ができること、教職員との会話の機会が増えること⁵⁾などである。近年特に、PTA活動

に参加することによるソーシャル・キャピタルの醸成が注目されている。具体的には、PTAは、小学校区内のソーシャル・キャピタルを醸成する潜在力を持ち、保護者・地域住民・学校をつなぐ可能性が指摘されている⁶⁾。ソーシャル・キャピタルとは、「信頼」、「互酬性規範」、「ネットワーク」といった社会的主体が持つ特徴によって、共通の目的を達成するために協調行動を導く関係とされている⁷⁾。ソーシャル・キャピタルに関する研究は経済学、社会学、公衆衛生学など様々な分野で行われており、ソーシャル・キャピタルが良好な地域ほど出生率が高く、失業率や犯罪率が低いこと等が指摘されている⁸⁾。また、ソーシャル・キャピタルは、学校区を取り巻く様々な問題を解決する可能性を秘めていること⁹⁾も報告されている。さらに露口 (2013) は、保護者相互をつなぐという視点から、PTAや学級懇親会の形骸化や簡素化の結果、保護者が学校に関わる機

1) 早稲田大学大学院人間科学研究科

2) 早稲田大学人間科学学術院

会が減少しているとし、この実態を改善することが保護者のソーシャル・キャピタル醸成と結びつく可能性を指摘している¹⁰⁾。

しかしながら、Whitley (2008) は、どのようにソーシャル・キャピタルが醸成されるのかについて、質的ソーシャル・キャピタル研究の重要性と、その研究数の少なさを指摘している¹¹⁾。また、日本国内のソーシャル・キャピタル研究においても、対象を高齢者や市町村単位とした量的研究が多い反面、質的研究が少ないことが指摘されており^{12) 13)}、PTAを対象としたソーシャル・キャピタル研究は、量的・質的双方ともに十分な蓄積があるとは言えない状況にある。

そこで本研究では、PTA活動を行うことで保護者のソーシャル・キャピタルがどのような過程を経て醸成されているのか、その具体的な経路や

メカニズムについて明らかにすることを目的とした。

【対象・方法】

対象者は、埼玉県所沢市立A小学校のPTA役員9名とした。

2015年10月～12月に、PTA活動とそれに関連した自身の変化等に関して、インタビューガイド(表2)をもとにした半構造化面接を各人に60分程度実施した。いずれの面接も、個人面接法で、A小学校のPTA会議室で行った。面接における対話は、対象者の許諾を得たうえで、ICレコーダーに記録し、録音内容を逐語録として起こしたのち、ラベルを作成した。分析手順は安田ら¹⁴⁾を参考に行った。分析方法には、サトウら(2006)の複線径路・等至性モデル(Trajectory

表1. 対象者の属性

対象者	性別	校区居住年数(年)	PTA役員歴(年度)
A	女	11	教養委員(H23), 地区役員(H25), 本部役員(H27)
B	女	19	学年委員(H18), 地区役員(H22), 本部役員(H23～27)
C	女	10	地区役員(H25), 本部役員(H26)
D	女	14	学年委員(H22), 本部役員(H26)
E	女	34	地区役員(H22), 本部役員(H25～26)
F	女	23	地区役員(H25), 本部役員(H27)
G	女	9	本部役員(H27)
H	男	12	本部役員(H27)
I	女	26	学年委員(H15・H20), 地区役員(H17)

表2. インタビューガイド

番号	質問内容
1	あなたのPTA役員としての役員歴を教えてください。
2	PTA役員の仲間に子育ての悩みを相談した経験があれば教えてください。
3	PTA役員の仲間以外に子育ての悩みを相談した経験があれば教えてください。
4	地域住民の顔が分かるようになったことに対して具体的な経験はありますか？
5	地域住民、他の保護者とのつながりの具体的な経験はありますか？
6	PTA活動を通じて、家族とのつながりが増えた経験はありますか？
7	PTA活動をきっかけに、あなたはどのように成長しましたか？
8	PTA役員の活動に参加した動機を教えてください。
9	あなたの子育てに対する意識は、PTA活動に参加して変化がありましたか？

表3. TEMに用いる用語解説

用語	意味
等至点: EFP	多様な経験の径路がいったん収束する地点.
両極化した等至点: P-EFP	等至点を一つのものとして考えるのではなく、それと対になるような、いわば補集合的な事象も等至点として研究に組み入れ、意図せぬ研究者の価値づけを未然に防ぐ.
分岐点: BFP	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点.
必須通過点: OPP	論理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるをえない地点.
社会的方向づけ: SD	個人の望む選択肢ではなく、望んでいない特定の選択肢を選ぶように仕向ける、環境要因や文化的な力の総体.
社会的促進: SG	SDに対抗し、個人の望んでいる行動や選択肢を選ぶように支援する、環境要因や文化的な力の総称.

資料：香曾我部ら（2014）の用語説明¹⁷⁾を筆者一部改変（等至点を「等至点」と「両極化した等至点」の2つに分類）

Equifinality Model : TEM) を用いた¹⁵⁾。TEMは、個々人の経験の流れを比較分析することを可能にすると考えられ、近年多くの分析で採用されつつある手法のひとつである。対象の見方・かわり方の気づきや多様な有り様を理解する¹⁶⁾ことにTEMの重要性がある。また、同じような立場にいる実践者のモデルとして機能する転用可能性を示すことができると考えられている。

TEM図で用いる用語については表3に示した。

なお、本研究ではソーシャル・キャピタル醸成プロセスの様式について露口（2014）を参考に、小学校区において学校を中心として形成される人々のつながりが、ネットワーク・協力規範・信頼の3つのプロセスを経て醸成されると仮定した⁶⁾。

本研究を実施するにあたり、個人情報への配慮、研究協力の自由意志、研究辞退方法、不参加による不利益が生じないことなどを口頭と文書にて説明し、許諾を得た。本研究は早稲田大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（申請番号2015-233）。

【結果・考察】

PTA活動における保護者のソーシャル・キャピタル醸成は、露口（2014）に従って、「保護者と学校のソーシャル・キャピタル醸成」（図1）、「保護者同士のソーシャル・キャピタル醸成」（図2）、「保護者と地域のソーシャル・キャピタル醸成」（図3）、「保護者と家庭のソーシャル・キャピタル醸成」（図4）の4つに分類した。

なお、TEM図の等至点を【ジェネラティヴィティの発達】と定めた。その理由は、対象者がエリクソンのいう成人期に該当すると考えられること、PTA活動を社会教育・生涯学習の観点からみた場合に親としての成長を見込めることという2点からである。エリクソンは、ジェネラティヴィティを、人間の自我発達の過程における成人期の発達課題とした。ジェネラティヴィティの発達によって、人は「世話」という心理社会的強さを獲得し、これを、人、観念、ものに対する広範な関与であるとした¹⁸⁾。

保護者と学校のソーシャル・キャピタル醸成
【半強制的な学校とのつながり】の必須通過点

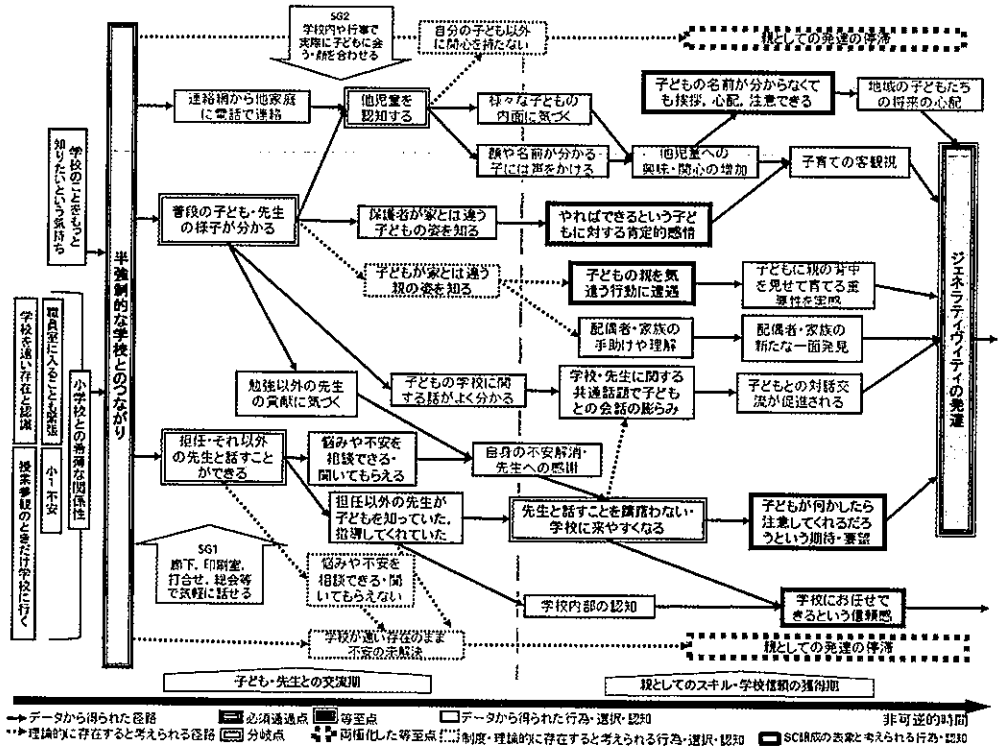


図1. 保護者と学校のSC醸成

(OPP) から、【ジェネラティヴィティの発達】を等至点 (EFP) として焦点を当て、必須通過点から分岐した対象者の経験をTEMを用いた図によって可視化した。

保護者と学校ソーシャル・キャピタル醸成の過程は、2期に整理された。第1期は<子ども・先生との交流期>で、第2期は<親としてのスキル・学校信頼の獲得期>とした。また、【担任・それ以外の先生と話すことができる】こと、【先生と話すことを躊躇わない・学校に来やすくなる】こと、【普段の子ども・先生の様子分かる】は、すべての対象者が経験し、その後の学校に対する印象に影響を及ぼしていたため、分岐点 (BFP) とした。また、自分の子どもだけではなく、他の子どもたちとも交流することができるとの指摘⁵⁾と一致するため、保護者が【他児童を認知】することも分岐点 (BFP) として定めた。

若林 (2006) は、ソーシャル・キャピタルの

内部構造について、ネットワークが信頼に影響を及ぼすとするモデル¹⁹⁾を報告している。このモデルは企業組織のみならず学校にも当てはまる可能性が高い。つまり、学校・先生と保護者の交流・つながりが形成されることで、学校・先生を信頼する保護者が増幅することが示唆される。本研究の結果から、保護者はPTA役員を通じて【学校にお任せできるという信頼感】という認知に至っており、若林のモデルを支持する結果であった。

また、Adamsら (2000) は、保護者の学校に対する信頼の決定要因を、教師との日常的な「対話における満足度」であること²⁰⁾を指摘している。「対話における満足度」は「対話の頻度」が多くなるほど、向上していくと推察される。本研究では、PTA役員を通じて保護者は先生に【悩みや不安を相談できる・聞いてもらえる】という経験に至っていた。PTA活動による学校・先生との

つながりは半強制的ではあるが、先生との対話の増加に寄与したことから、PTA活動が、学校に対する信頼の増加につながる可能性が示唆された。また、Turneyら（2009）は、保護者が学校に関わることによって、子どもが学校の大切さを自覚し、保護者は他の親・教師・管理職のことを知ることができ、子どもについてのより詳細な情報が得られる²⁰⁾と指摘している。本研究では、保護者が【家とは違う子どもの姿を知る】ことで、子育ての客観視をする可能性が考えられた。また、子どもは学校で【子どもが家とは違う親の姿を知る】ことに至る可能性も考えられた。以下は逐語録の一部である。

「仕事だったら、全然見えないとこでやるので、（保護者が）疲れてても『何で疲れてるの？』って、『僕知らないよー』って気持ちがありますけど、自分たちの学校のためにやってくれてるっていうのが、（子どもに）見えたりとかするからか、ちょっと譲歩が見えるようになってます。」

「普段が不真面目なんで、なんかすごく真面目な顔してるとか茶化されたくらいで、『珍しいね、母さんがこんな顔してる』とかいうような。」

以上の語りからは、子どもが保護者の普段とは違う姿を間近で見ることによって、学校が自分たちだけで成立しているのではなく多くの人の関わりや協力があって成り立っていると思う気持ち、保護者に対する感謝の気持ちが生まれている可能性が考えられる。

露口（2014）は、保護者の学校参加が学校に対する信頼向上に寄与すること⁶⁾を指摘しているが、今回、学校信頼に至るメカニズムを示すことができた。具体的には、保護者が単純に学校参加するだけでなく、保護者が先生に【悩みや不安を相談できる・聞いてもらえる】ことや、【担任以外の先生が我が子を知っていた】という要素から、【先生と話すことを躊躇わない・学校に来やすくなる】といった状態に至る必要があった。つ

まり、保護者が学校に来ることに加え、保護者にとって相談しやすい環境、先生が保護者の話しに耳を傾けられる時間的・精神的余裕を持っているといった要素が学校信頼の向上に必要であると考えられる。

保護者同士のソーシャル・キャピタル醸成

【半強制的な保護者同士のつながり】の必須通過点（OPP）から、【ジェネラティブィティの発達】を等至点（EFP）として焦点を当て、必須通過点から分岐した対象者の経験をTEMを用いた図によって可視化した。

保護者同士のソーシャル・キャピタル醸成の過程は、2期に整理された。第1期は＜保護者同士の関係構築期＞で、第2期は＜子育て資源の獲得・保護者ソーシャル・キャピタル醸成期＞とした。また、学校で形成されるソーシャル・キャピタル醸成の重要な要素は、対話・交流による情報交換、協働的活動による課題達成を通じての規範形成であるとの指摘²²⁾から、【集まる回数の蓄積、会う時間の蓄積】、【災害時避難宿泊体験、ふれあい祭りの開催（保護者主催イベント）】を分岐点（BFP）として定めた。

第1期は、SG1の【一緒にメンバーが良い・共感できる、みんな同じ立場であるという認識】、SG2の【車座になってじっくり話す時間を持てた、困難を乗り越えたことによる団結力の高まり】の影響を受けていた。また、SD1の【面倒だと思いう気持ち、メンバーと馴染めない、正社員として働いている】、SD2の【仕方なくやっているという感情、正社員として働いている】の影響を受けていた。【会議・打合せで他の保護者と顔を合わせる・話す】を通り、【集まる回数の蓄積、会う時間の蓄積】を経て、【悩みについて自然と井戸端会議が始まる】へと至っていた。また、【イベント準備から時間の共有】をすることによって、【知り合いの増加・様々な困難の出現と解決】を経て、【災害時避難宿泊体験・ふれあい祭りの開催（保護者主催イベント）】に至っていた。

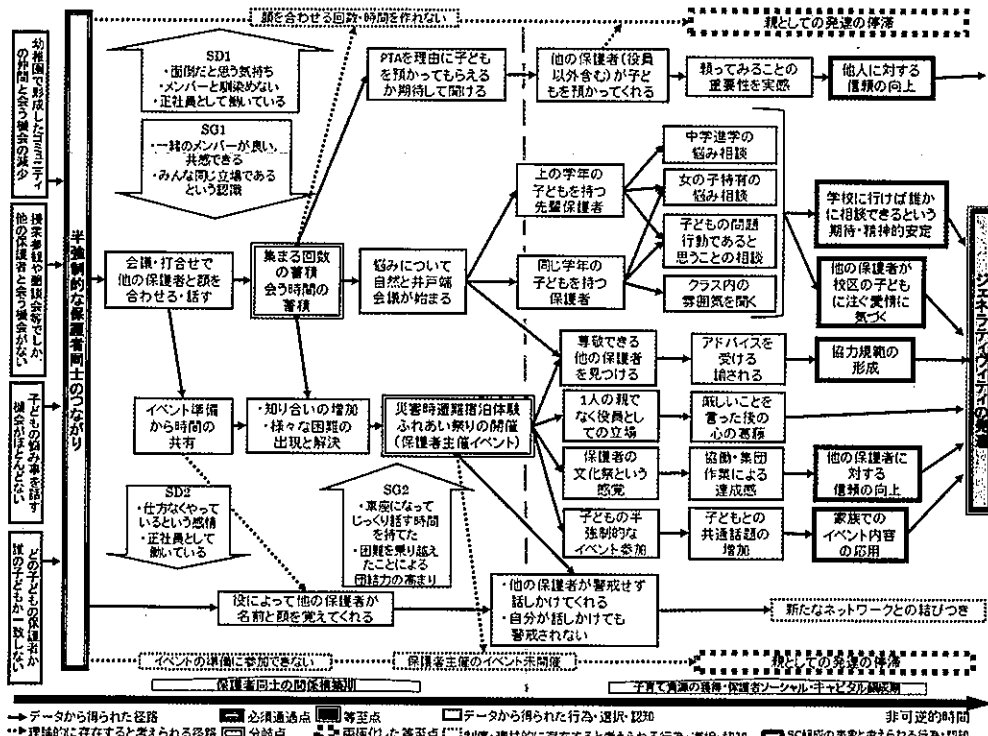


図2. 保護者同士のSC醸成

第2期は、【上の学年の子どもを持つ先輩保護者】や【同じ学年の子どもを持つ保護者】に、【中学進学への悩み相談】や【女の子特有の悩み相談】、【子どもの問題行動であると思うことの相談】、【クラス内の雰囲気を知る】ことを経て、【他の保護者が校区の子どもに注ぐ愛情に気づく】や、ソーシャル・キャピタル醸成の表象と考えられる認知である【学校に行けば誰かに相談できるという期待・精神的安定】に至り、等至点である【ジェネラティビティの発達】に収束した。また、【尊敬できる他の保護者を見つける】ことを経て、先輩保護者から【アドバイスを受ける・諭される】に至り、ソーシャル・キャピタル醸成の表象と考えられる【協力規範の形成】に到達していた。【1人の親でなく役員としての立場】から、他の保護者たちに言葉がけをして、【厳しいことを言った後の心の葛藤】を感じ、【ジェネラティビティの発達】に収束した。【協働・集団作業

による達成感】を経て、【他の保護者に対する信頼の向上】につながっていた。また、自分の仕事や他の用事では頼みづらいが、【PTAを理由に子どもを預かってもらえるか期待して聞ける】こと、実際に【他の保護者(役員以外含む)が子どもを預かってくれる】ことを経て、【頼ってみることの重要性を実感】し、【他人に対する信頼の向上】につながった。

露口ら(2013)は、人々が顔を合わせて対話する機会や場を設定すること、参加者が協力して取り組む課題を設定すること²²⁾が、小学校区におけるソーシャル・キャピタル醸成に必要なことであるとしている。その点、PTA活動では、必然的に保護者が【会議・打合せで他の保護者と顔を合わせる・話す】ことを行い、今回に限って言えば、A小学校では保護者が自ら主催し、【災害時避難宿泊体験ふれあい祭りの開催】を行っていた。また、保護者主催のイベント後には【協力規

範の形成】に至っていた。本研究の結果から、PTA活動はソーシャル・キャピタルの醸成に必要なファクターを十分に含んでいる可能性が示唆された。

また、Hanifan (1916) は、「自分たちで自分たちのために行う者が多くなればなるほど、コミュニティのソーシャル・キャピタルは増大する」²³⁾と述べており、今回のケースでは、取り組む課題（イベント）を保護者自らが設定し、その課題に向かって保護者が協力し合えたからこそ、ソーシャル・キャピタルの醸成の表象が顕著であったことも示唆される。一方、Zajonc (1968) は、新奇の対象であっても、その対象に繰り返し接触する中で、次第にポジティブな感情が生まれること²⁴⁾を指摘している。この変化は単純接触効果²⁵⁾と呼ばれ、本研究の結果からも確認できたと考えられる。つまり、ただ【会議・打合せで他の保護者と顔を合わせる・話す】だけではソーシャル・キャピタルの醸成に結びつかず、【集まる回数の蓄積・会う時間の蓄積】を経ることによって、【知り合いの増加、様々な困難の出現と解決】や【悩みについて自然と井戸端会議が始まる】に至る可能性が考えられた。現在、PTA活動のための時間が取れない人が増えているとされているが、「保護者同士の時間の共有・蓄積」は、PTA活動を通じたソーシャル・キャピタルの醸成には不可欠であることを示唆できた。

先行研究では、保護者が「子どもの友達の親を知っている」ことや「親相互の支援関係」があることで、保護者相互での対話、保護者の学校への関わり方に影響がある²⁶⁾とされている。本研究でも、知り合いの増加、集まる回数・会う時間の蓄積等が「子どもの友達の親を知っている」ことにつながるメカニズムを図示できた。また、保護者同士のつながりが子どもの行動の基準についての共通規範の形成に寄与する可能性も考えられた。さらに、保護者が子どもの問題行動について相談することは、カタルシス効果の享受や自身の子どもに対する情動調整を得ていることが示唆された。

以下は逐語録の一部である。

「名前分からなくても、注意しなきゃいけないから。おらおら一みたいな。」

「自分の子どもだけじゃなくて、小学校の子どもとか、帰り道で、しゃがんでたり、泣いてたら、どうしたの？って、やっぱ言っちゃいますね。」

「気が付いたら、みんなが自分の子みたいな、ちょっと言いすぎですけど。」

以上の語りから、子どもの情緒的問題行動や、攻撃的な行動の抑制につながっている可能性も示唆された。

学校に行けば誰かに相談できるという期待感・精神的安定は、「親相互の支援関係」の構築に相当すると思われる。この関係からPTAは、保護者のメンタルヘルスの保持・増進に資する可能性が示唆された。PTA活動を地域社会のメンタルヘルス向上のための足がかりとして捉えることも可能であるかもしれない。

保護者と地域のソーシャル・キャピタル醸成

【半強制的な地域とのつながり】の必須通過点（OPP）から、【ジェネラティブィティの発達】を等至点（EFP）として焦点を当て、必須通過点から分岐した対象者の経験をTEMを用いた図によって可視化した。

保護者と地域ソーシャル・キャピタル醸成の過程は、2期に整理された。第1期は＜保護者・地域住民の相互理解期＞で、第2期は＜具体的な行動・認知への移行期＞とした。【区長、自治会長、スクールガード、後援会、消防団、体育協会の方の顔を覚える・覚えてもらう】、【地域住民に保護者も子ども名前と顔を覚えてもらえる】を分岐点（BFP）とした。

稲葉ら (2013) は、女性の社会参加の基盤整備は、物理的に社会参加の機会が減る子育て期への対応が重要である²⁷⁾と指摘しているが、PTA活動には、保護者と地域住民の交流を促し、保護者が地縁的なコミュニティへのスムーズな参加に寄

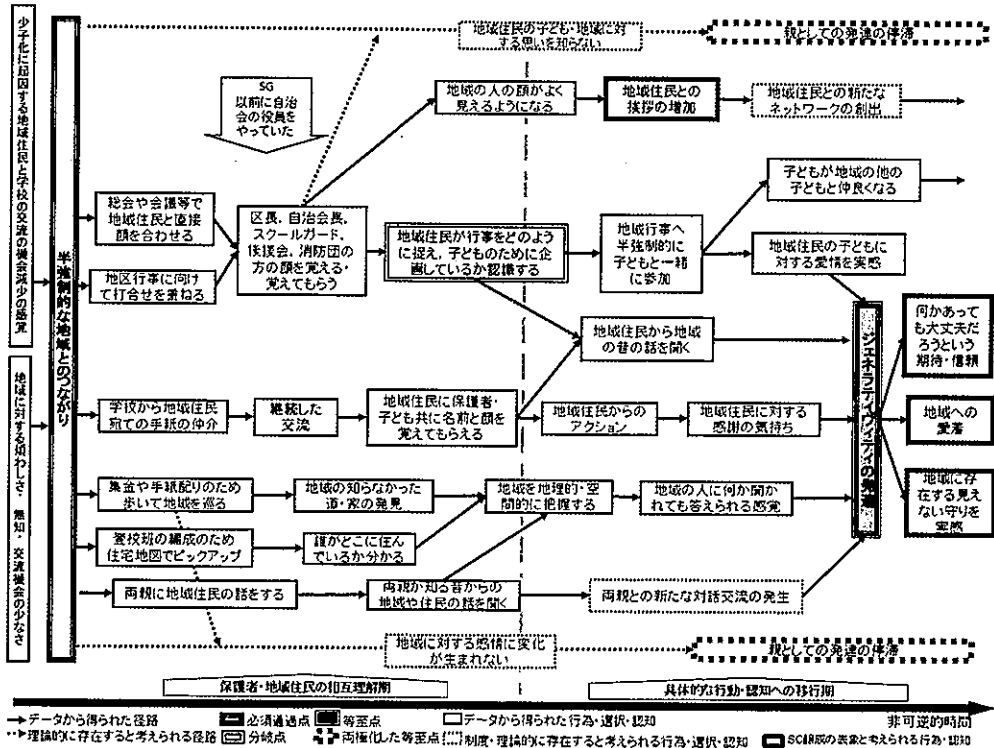


図3. 保護者と地域のSC醸成

与する可能性が示唆された。また、PTAは、社会教育関係団体と位置づけられている。保護者は地縁的なコミュニティの中で、地域住民の話を聞き、地域住民の「地域・子どもへの愛情」を知り、自らの学びを得て、「世代継承」や「世話することの必要性を感じ取り、【ジェネラティヴィティの発達】に至っていた。

内閣府(2011)では、日本の高齢者の社会参加は、配偶者・パートナーなどの同居している家族が中心で、それ以外の人とのつながりは、比較的弱く、儀礼的なつながりに依拠していること²⁸⁾を報告しているが、本研究では、PTA活動によって保護者は【地域住民から地域の昔の話を聞く】、地域住民と【継続した交流】を経験していた。地域とのつながりができることで、子育てについて地域住民に相談しやすくなる⁵⁾との指摘があるが、本研究では、【地域住民との挨拶の増加】が起こる過程までしか分析できず、「挨拶の増加

から、【地域住民との新たなネットワークの創出】につながり、どのような条件下であれば、地域住民に子育ての相談をするに至るかは明らかにできなかった。

志水ら(2014)は、保護者の地域行事への参加率と子どもの学力に正の相関があること⁹⁾を報告している。本研究から、保護者は【地域住民が行事などをどのように捉え、子どものために企画しているか認識する】ことで、地域住民に対して感謝の気持ちを抱き、地域行事に子どもと一緒に参加していた。子どもにとっては半強制的な参加となるが、地域行事に参加することによって【子どもが地域住民と交流】し、【地域の他の子どもと仲良くなる】ことが示唆され、「昔ながらの遊び」を地域住民と行うことで、自ら学ぶ力が養われ、主体性や学力につながるが考えられた。また、「学年の違う地域の友達」と遊び、仲良くなることで、地域への愛着や安心感が醸成され、情緒的

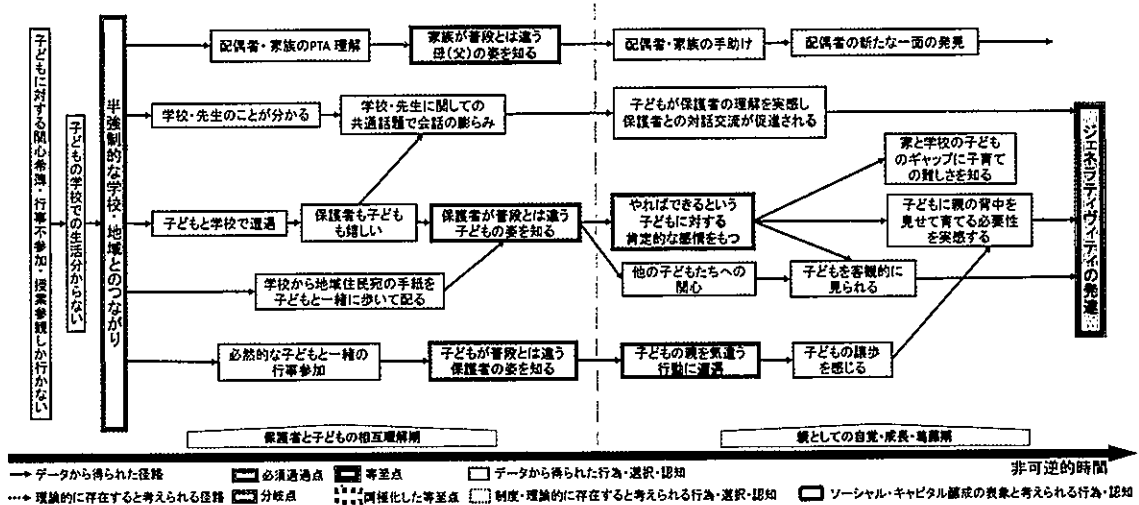


図4. 保護者と家庭のSC醸成

な問題行動抑止につながる事が考えられた。しかし、役員経験が1年目の保護者は、「地域住民の子どもへの思い」を認識できていなかった。したがって、複数年に渡るPTA役員経験と地域行事参加が、子どもへの学力に影響を与える可能性も考えられた。

保護者と家庭のソーシャル・キャピタル醸成

【半強制的な学校・地域とのつながり】の必須通過点 (OPP) から、【ジェネラティヴィティの発達】を等至点 (EFP) として焦点を当て、必須通過点から分岐した対象者の経験をTEMを用いた図によって可視化した。

保護者と家庭のソーシャル・キャピタル醸成の過程は、2期に整理された。第1期は「保護者と子どもの相互理解期」で、第2期は「親としての自覚・成長・葛藤期」とした。

家庭内のソーシャル・キャピタルは、家族の間の結束や凝集性 (cohesion) であり²⁹⁾、子どもに対する親の観察力や親子の相互関係である³⁰⁾との指摘がある。この家庭内ソーシャル・キャピタルが強いことで、子どもの心の健康にいい影響を与える³¹⁾とされている。本研究では、保護者と子どもの関係において、PTA活動を通じて【子

どもが保護者の理解を実感し、保護者との対話交流が促進される】ことが認められており、保護者が普段知らない学校の様子を知ること、子どもは「親が分かってくれているという気持ち」になり、親との会話が促進されたと考えられた。この関係の継続が、子どもからの悩みの相談、様々な報告も円滑になり、子どものメンタルヘルスに好影響を与える可能性も示唆される。

全体のまとめ

本研究では、PTA活動において保護者のソーシャル・キャピタルがどのような過程を経て醸成されているのか、その具体的な経路やメカニズムについて検討を行った。その結果、PTA活動における保護者のソーシャル・キャピタルの醸成には、「保護者と学校のソーシャル・キャピタル」、「保護者同士のソーシャル・キャピタル」、「保護者と地域のソーシャル・キャピタル」、「保護者と家庭のソーシャル・キャピタル」の4つに分類されることが認められた。

本研究では、PTA活動における保護者のソーシャル・キャピタル醸成の過程を示すことができた。これは、PTAには無駄な活動が多い、拘束時間が長いといった社会的な論調であるPTA不

要論に対して、本研究は質的研究であり個別なケースではあるが、PTAの存在意義を付与し、新しいPTA活動の効用を提示できた。また、PTA活動を行うことによる保護者の親としての成長に至るためには、それぞれ分岐点 (BFP)・必須通過点 (OPP) を経る必要があることが示唆された。さらに、PTAは保護者のメンタルヘルスの保持・増進に寄与する可能性も認められた。「学校に行けば誰かに相談できる・解決できるという期待感や安心感」は、アントノフスキーが唱える「健康生成論」³²⁾の首尾一貫感覚に相当すると考えられた。

本研究では一般化のための事実発見はできていないが、転用可能性が認められたことで、PTA活動による保護者のソーシャル・キャピタル醸成の実存性や過程を示すことができた。

今後は対象を広げた調査を実施し、今回の研究で確認されたPTAにおける保護者のソーシャル・キャピタル醸成過程の転用可能性を裏付ける必要がある。

参考文献

- 1) 厚生労働省『平成26年版厚生労働白書～健康・予防元年～』2014.
- 2) 厚生労働省『平成23年度全国母子世帯等調査結果報告 (http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-katei/boshi-setai_h23/)』雇用均等・児童家庭局 家庭福祉課, 2012.
- 3) Ogihara Y, Fujita H, Tominaga H, et al. Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in psychology*, 6, 2015, p1490. DOI: <http://dx.doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01490>
- 4) 朝日新聞「PTAどう考えますか? 3」朝日新聞朝刊, 東京本社, 9, 2015/5/10.
- 5) 神奈川県教育委員会『PTA活動のためのハンドブック (<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/760749.pdf>)』2015.
- 6) 露口健司「ソーシャル・キャピタルと教育」稲葉陽二・大守隆・金光淳他『ソーシャル・キャピタル「きずな」の科学とは何か』ミネルヴァ書房, 2014, pp.97-126.
- 7) Putnam RD, Leonardi R, Nanetti RY. *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, 167, 1993. 河田潤一 (訳)『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版, 2001.
- 8) 内閣府『ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』内閣府 国民生活局, 2003.
- 9) 志水宏吉・伊佐夏実・知念渉他『調査報告「学力格差」の実態』岩波書店, 2014.
- 10) 露口健司「保護者による学校信頼」『ソーシャル・キャピタルと教育—「つながり」づくりにおける学校の役割—』ミネルヴァ書房, 2016, pp.104-122.
- 11) Whitley R. Social capital and public health: Qualitative and ethnographic approaches, Kawachi I, Subramanian SV, Kim D, editors. *Social capital and health*, 2008, pp.95-115.
- 12) 神原理「ソーシャル・キャピタルの質的調査法」『社会関係資本研究論集』2, 2011, pp.81-100.
- 13) 井上智代・片平伸子・平澤則子他「日本におけるソーシャル・キャピタルと健康に関する文献研究」『新潟県立看護大学紀要』2, 2013, pp.10-15.
- 14) 安田裕子・サトウタツヤ『TEMでわかる人生の経路—質的研究の新展開』誠信書房, 2012, pp.2-48.
- 15) サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵他「複線経路・等至性モデル—人生経路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して—」『質的心理学研究』5, 2006, pp.255-275.

- 16) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉他（編）『TEA実践編 複線経路・等至性アプローチを活用する』新曜社，2015，pp.166-170.
- 17) 香曾我部琢・松延毅「公立保育所保育士の成長プロセスと実践コミュニティ：グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）と複線経路・等至性モデル（TEM）の比較から」『宮城教育大学紀要』48，2013，pp.167-180.
- 18) Erikson EH, Erikson JM. *The Little Cycle Completed*, New York, W W Norton, 1982, 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）『ライフサイクル，その完結＜増補版＞』みすず書房，2001，pp.71-78.
- 19) 若林直樹『日本企業のネットワークと信頼 企業間関係の新しい経済社会学的分析』有斐閣，2006.
- 20) Adams KS, Christenson SL. Trust and the family-school relationship examination of parent-teacher differences in elementary and secondary grades. *School Psychology*, 38 (5), 2000, pp.477-497.
- 21) Turney K, Kao G. Barriers to School Involvement: Are Immigrant Parents Disadvantaged? *Educational Research*, 102 (4), 2009, pp.257-271.
- 22) 露口健司・今野雅裕・永井順國「小学校区においてソーシャル・キャピタルを醸成する教育政策の探求—第1年次調査のまとめ—」『地域コミュニティと学校の新たな関係創造研究プロジェクト報告書』政策研究大学院大学，2013.
- 23) Hanifan LJ. The Rural School Community Center. *American Academy of Political and Social Science*, 67, 1916, pp.130-138.
- 24) Zajonc RB. Attitudinal effects of mere exposure. *Personality and social psychology*, 9, 1968, pp.1-27.
- 25) 宮本聡介・太田信夫（編著）『単純接触効果研究の最前線』北大路書房，2008.
- 26) Coleman, J.S. Social capital in the creation of human capital. *American journal of sociology*, 94, 1988, pp.95-120.
- 27) 稲葉陽二・藤原佳典『ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立—重層的予防策とソーシャルビジネスへの展望』ミネルヴァ書房，2013，pp.1-16.
- 28) 内閣府『第7回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査（<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/>）』2011.
- 29) Fokel I, Silbereisen RK. Family economic hardship and depressed mood among young adolescents from former East and West Germany. *American behavioral scientist*, 44, 2001, pp.1951-1971.
- 30) Rothon C, Goodwin L, Stansfeld S. Family social support community “social capital” and adolescents’ mental health and educational outcomes: A longitudinal study in England. *Social Psychiatry Psychiatric Epidemiology*, 47 (5), 2012, pp.697-709.
- 31) Kawachi I・高尾総司・Subramanian SV『ソーシャル・キャピタルと健康政策』日本評論社，2013，pp.443-445.
- 32) Antonovski A. *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. Jossey-bass publishers, San Francisco, 1987. 山崎喜比古・吉井清子（訳）『健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂高文社，2001.

